

令和8年度 入学試験（一般 後期選抜 第1回）問題

国語

| | | | |
|------|--|----|--|
| 受験番号 | | 氏名 | |
|------|--|----|--|

- 指示があるまで開かないこと。

令和7年12月13日(土) 9時00分 ~ 9時45分

【注意事項】

- 試験問題の数は23問です。
- 問題用紙及び解答用紙に受験番号・氏名を必ず記入してください。
解答用紙はマークシートと記述解答用紙の2枚あります。下記の記入例をみて記入してください。
- 解答は、指示に従いすべて解答用紙にマークしてください。問題用紙に記載しても無効です。
なお、マークシートの解答用紙には解答欄が50問までありますが、23問からはマークしても無効です。
- 試験問題は四-【21】以外すべて5つの選択肢があります。質問に適した選択肢を選び、その番号を解答用紙にマークしてください。2つ以上マークした場合は無効となります。
なお、試験問題の四-【21】については、記述解答用紙の間【23】に記入してください。

【解答用紙マークシート記入例】

| | | | | | |
|------|------------|---|----|----|----|
| フリガナ | セイ トウ ハナ コ | 年 | 月 | 日 | 国語 |
| 氏名 | 聖 灯 花 子 | 7 | 12 | 13 | |

〔受験番号記入例〕

| 番 号 | 問 | 解 答 欄 | 問 | 解 答 欄 |
|-------|---|-----------|----|-----------|
| 32001 | 1 | ① ② ③ ④ ⑤ | 11 | ① ② ③ ④ ⑤ |
| | 2 | ① ② ③ ④ ⑤ | 12 | ① ② ③ ④ ⑤ |
| | 3 | ① ② ③ ④ ⑤ | 13 | ① ② ③ ④ ⑤ |

マーク例

| 良い例 | 悪い例 |
|-----------------------|---|
| <input type="radio"/> | <input checked="" type="checkbox"/> <input type="radio"/> <input type="radio"/> |

※番号欄には、右づめで受験番号を記入し、該当部分の数字をマークしてください。

【記述解答用紙記入例】

| |
|------------------|
| 受験番号 |
| 32001 |
| 氏名 |
| 聖 灯 花 子 |
| 評 定 |
| |

令和八年度 入学試験（一般 後期選抜・第一回）問題（国語）

一次の文章を読んで、後の【1】～【6】に答えなさい。

どういう姿勢で——詩を書いているのか、というのが私への問いかけです。

鳥が首をかしげるように、私は私の中の声に耳をかたむけてみました。

「ラクナシセイ、ゴク、ラクナシセイ」

私はうなずき、無理な姿勢だったら、何十年もへたな詩を書き続けてこれるものではなかった、と納得しました。ではラクにどうしてきたか、とたしかめると、

「バカミタイ、バカミタイ」

と九官鳥のような、たどたどしい答えが返ってきて、思わず吹き出してしまいました。どうひいき目に見ても、賢いシヨセイではなかった、と。

私はいつも、先の方に希望というものを見付け出せなかったので、目先のことにとらわれ、わずかな過去に根を張り、その範囲で心 **㉔** 暮らしてきました。私の願ったものはまわりの者のしあわせであり（これは逆に不幸をもたらし勝ちだったけれど）、無事に、どうしたら皆が食べて行けるか、ということであり、戦争があれば火の中を夢中でぐりぬけることでした。

食糧がなくなれば、持てるだけの物を背負いに遠く出かけてゆき、平和になればもう戦争が起こらないようにと祈り、どうか家族が傷つくことなく生命をまっとうしてほしいと思う。勤めに行けば、何とかつつがなく仕事を済ませようと励み、夕方終われば、皆に少しでもおいしいものを食べさせたい、と百貨店の食品売り場を歩く。一方、腹が立てばいさかい。愚痴やあやまちもどっさり。せめてこれ以上悪いことはありませんように、と **㉕** に、びくびくしながら眠る。

その片手間というのではなく、そのこととわかち難く、詩や文章を書きつづけてきました。で、私の詩を書く姿勢は、私の暮らし方の姿勢であり、文学への理想も、詩への目標も単独にはありえない、つづり方練習生にすぎません。

女としては結婚せず、まして母ともならず、銀行員としての長い月日、昇格といった点から見ると、最低の線を人後に **㉖** 歩いてきました。気が付いたら、そろそろ定年が近くなっている、というのに。

手に持てる何ものもなければ

この身まずしき菊の

花を捧げむ葉を捨てむ

大空に満ちわたる美しき歌声の

そのひと節を求むれば。

これは少女期に書いた私の短章ですが。花が持ち得ない言葉、声に対する悲願。無いものねだり。四十歳をはるかに越して、手に持てる何ものもないのは、昔も今も同じということになります。

バカミタイ、という言葉の説明がこれで行ったことにして。

ラクな姿勢、ということに移ると。子供が友だちを選ぶように、私は読むこと、書くことと仲よくしました。なぜそうなったのか、あまり自然で覚えていません。私のセイジヨウが無心にそれをしたかったのだろうと思います。詩には小学生のころからひかれ、見よう見まねで書きましたけれど。図書館で手当たり次第にひらいた詩集は、読んでも読んでも決して面白いものではありませんでした。

最近私は詩の実用性、などとへんなことを言ったりするのでありますが。その面白くなかった詩の中に、応用のきくもの、

自分に合った、自分の心が育ってゆくのに都合の良い何か、をどっさり感じとって、飽きるということがなかったのだと思います。

そうして目的もなしに書きつづってきた詩が、結果として私の集計、私の目的だったような形をして前に置かれました。それがこんど出した、わずか二冊日の詩集『表札など』です。

私にとって詩は自身との語り。ひとに対する語りかけ。読んでもらいたければかりに一冊にまとめたのですけれど、みとめてもらえるというようなことは①でした。詩が私を教育し、私に約束してくれたことがあったとすれば、書いても将来、何の栄達も報酬もないということ。もう少し別の言いかたをゆるしてもらえらるなら、世間的な名誉とか、市場価格にあまり左右されない人間の形成に、最低役立つだろう、ということでした。その点では、詩は実用的ではありません。その非実用性の中に、私にとっての実用性をみとめたのでした。

いつか書店でパラパラと詩の本をめくっていたら、「詩による社会変革は可能か、不可能か」というアンケートの設問がとびこんできました。私はとっさに、可能でないならつまらない、とひとりで答えてしまい、あと、だれがどのように答えているか、読みそびれましたが、ひとつの変革、次の展望、新しい生命、価値観の転換、その方法、手段などに、表立つことなく何らかの形で加わる力がないならば、目を洗う、というちいさなことすら、詩がなしとげることができないのではないのでしょうか。

自分の詩を棚に上げて考えたことです。

(石垣りん『持続と詩』)

【1】 二重傍線部a⑥の漢字として正しいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問1 2】

- | | | | | | | |
|---|---|------|------|------|------|------|
| 1 | a | ① 所生 | ② 処世 | ③ 所性 | ④ 処生 | ⑤ 所世 |
| 2 | b | ① 性状 | ② 生常 | ③ 性情 | ④ 生状 | ⑤ 性常 |

【2】 空欄ア①に該当する語を、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問3 4】

- | | | | | | | |
|---|---|-------|-------|-------|-------|-------|
| 3 | ア | ① 核心 | ② 用心 | ③ 細心 | ④ 戒心 | ⑤ 小心 |
| 4 | イ | ① 前提外 | ② 規格外 | ③ 問題外 | ④ 勘定外 | ⑤ 想定外 |

【3】 傍線部「心」に続くAとして正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。【解答欄は問5】

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|-------|---|------|---|-------|---|------|---|-------|
| 5 | ① | かたむけて | ② | みたして | ③ | うちこんで | ④ | ゆらして | ⑤ | たてかけて |
|---|---|-------|---|------|---|-------|---|------|---|-------|

【4】 傍線部「人後に」に続くBとして正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問6】

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| 6 | ① | 果てて | ② | 落ちて | ③ | 朽ちて | ④ | 降りて | ⑤ | 秘めて |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|

【5】 作者・石垣りんの作品集として正しいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問7】

- | | | | | | | |
|---|---|----------|---|------------|---|-------------|
| 7 | ① | 『倚りかからず』 | ② | 『二十億光年の孤独』 | ③ | 『わたしを束ねないで』 |
| | ④ | 『略歴』 | ⑤ | 『深呼吸の必要』 | | |

【6】 筆者は波線部で、読者に何を伝えたかったのか。筆者の思いとしてふさわしいものを、①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【解答欄は問8】

8

-
- ①たとえ世の中からどう言われようと、詩作への私の姿勢は何かあっても変わらない、という思い。
②自分の詩にはそれなりに信念を込めてきたつもりだが、まだまだ道半ばと悩む日々が続く、という思い。
③変革など大きなことでなくとも何らかの社会参加の意識がないのなら、詩作の意味はない、という思い。
④詩による社会変革の可否がアンケートになるということ自体に、思わず我が意を得たり、という思い。
⑤詩を作りながらあれこれ迷ってきた人生だったが、ようやく確かな光が見えつつある、という思い。

二次の【7】～【11】の記述のなかの□□に用いる言葉としてふさわしいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【7】「人々はまるで□□の子を散らすように、逃げ去った。」【解答欄は問9】
① 蟻 ② 蜘蛛 ③ 鼠 ④ 山羊 ⑤ 蜂

【8】「もっと大所□□所から、議論してほしい。」【解答欄は問10】
① 随 ② 急 ③ 高 ④ 局 ⑤ 要

【9】「騙そうとしても、そうは□□が卸さないよ。」【解答欄は問11】
① 母屋 ② 庄屋 ③ 床屋 ④ 長屋 ⑤ 問屋

【10】「出席者全員が、まさに思案投げ□□だった。」【解答欄は問12】
① 首 ② 膝 ③ 肩 ④ 顔 ⑤ 足

【11】「父はいつも、着た切り□□だった。」【解答欄は問13】
① 燕つばめ ② 鷗かもめ ③ 烏からす ④ 雀すずめ ⑤ 鳶とんぼ

三次の【12】～【16】の作品名の空欄の語として正しいものを、それぞれ①～⑤から選び、その番号をマークしなさい。

【12】『□□の月』（角田光代）【解答欄は問14】
① 紙 ② 石 ③ 板 ④ 砂 ⑤ 布

【13】『正坊と□□』（新美南吉）【解答欄は問15】
① シロ ② チビ ③ アカ ④ シマ ⑤ クロ

【14】『□□のすきなうし』（マンロー・リーフ）【解答欄は問16】
① やま ② くさ ③ かわ ④ はな ⑤ そら

【15】『欲望という名の□□』（テネシー・ウィリアムズ）【解答欄は問17】
① 車 ② 船 ③ 電車 ④ 飛行機 ⑤ 馬車

【16】『□□』（島崎藤村）【解答欄は問18】
① 波壊 ② 破戒 ③ 刃壊 ④ 派戒 ⑤ 破壊

四次の文章を読んで、後の【17】～【21】に答えなさい。

昨年の十一月末に、郷里の鶴岡に行ってきた。地区の小、中学校の校長会で講演をするためである。

私は度胸がないので、講演などと言われると、真先にことわる口実を考えるほうである。じっさいに一時間半だの、二時間だのと長い時間話していると、途中で一度か二度は、自分が何を喋っているかわからなくなる。一種の錯乱状態に陥るわけだ。今度の講演も、ことわる口実に窮して引きうけたものの、校長会としては、講師の人選を誤ったというべきであった。

それに今度は、私の話を聞いてくれる人びとが、全部私の先輩にあたるのである。私は昭和二十四年に山形師範を卒業して、二年間教職についている。しかしこの年次あたりの卒業生は、いま(a)四十代と呼ばれ、ぼつぼつ教頭になる人は出てきたが、まだ校長はいないというような話だった。その当時、戦後の六・三制のために、教員の需要が急増し、大量の教師が送り出されたので、校長の椅子は簡単には回って来ないということなのである。従って校長会で講演するということは、先輩ばかり眼の前において、何か言うということになる。そのことにも、出かける前、私は少し窮屈な感じを持っていた。

しかし上野で汽車に乗りこむと、そういうこととはべつに、どこか浮き浮きするような気分が私をとらえはじめていた。それが何のためか、私にはわかっていた。私は郷里の初冬の風景が好きなのである。暗鬱な雲が垂れこめ、空は時どきそこから曇やあられを降らせる。そして裂けるとしか言いようがない雲の隙間から、ほんの僅かの間日が射し、黒い野や灰色の海を照らし出す。そういう日日の反覆のあとに、ある夜静かに休みなく雪が降りつづけ、朝になると世界が白くなっているのである。

初冬に至って、私が生まれ育った土地は、他の土地と紛れるところのない、まさにその土地であるしかない相貌をあらわすのである。私がこの季節を好むのは、多分そのためである。講演の話があったおかげで、私は一番好きな季節に鶴岡へ帰ることが出来たわけだった。

私はふだん寒がりです、家の者にひやかされるぐらいだが、不思議なことに、郷里のそういう季節に帰って、寒いと感じたことがない。寒くないといえればおかしいが、つまりその寒さに、いくらでも耐えられるのである。雲に降りこめられながら、平気で歩き回る。生まれた土地の不思議さというしかない。

講演の会場は二カ所にわかれていた。一カ所は吹浦のホテルである。吹浦は秋田との県境に近い海岸にある。私は鶴岡からそこまで、教育委員会の公用車で送ってもらった。車は長い間冬ざれた平野を北に走りつづけ、やがて大火があった酒田を過ぎると砂丘に入った。防風林の間を走るその道は、国道七号線である。

車の中で、私は三十年も前に、ただ一度だけ吹浦にきていることを思い出していた。思い(b)ことがあって、あてもなく汽車に乗り、吹浦にまできて降りると、そこで半日も防風林の中を歩きまわったり、砂の上に坐って海を眺めたりした。吹浦は海水浴場があって、夏の間はにぎやかな土地であるが、そのときは海水浴の季節も終わって、海辺には人影もなく、赤い実をつけたハマナスの群落だけが目立っていた。

青春には、*なところがある、と私はそのときのことを思い返していた。しかし教育委員会差しまわしの車に乗り、へたな講演をしに行こうとしている現在の自分も、**でないこともないという気がした。

吹浦での講演を済ませ、同じ車で今度は次の会場である、やはり海岸にある由良のホテルに行った。さっき来た国道七号線を逆に鶴岡までもどり、さらに海岸まで行く間に、平野は夜になり、氷雨が車の窓を叩いた。

講演は翌朝なので、由良のホテルにつくとその夜は校長先生方の宴会に招かれて酒を飲んだ。見覚えのある顔がかなりいて、挨拶したり、盃をやりとりしている間に、先輩だからどうこうという堅苦しい気分は、私の念頭から消えかけていたようである。

酔って部屋にもどると海の音がした。強い風が吹き荒れ、海はたえずこうこうと鳴りつづけていた。それは砂浜に寄せる波音とは別に、海そのものが鳴る音だった。酔っていたが、私はしばらく眠れずにその音を聞いた。

いつもそうだが、郷里では私はふだんより心が傷みやすくなっている。人にやさしくし、喜びをあたえた記憶はなく、若さにまかせて、人を傷つけた記憶が、身をよじるような悔恨をとまなびて甦るからであろう。

郷里はつらい土地でもある。私はその夜、めずらしく途中で目ざめ、また海の音を聞いた。その折り出来た駄句を、

